

はじめに

久松農園（茨城県土浦市）は、4 ha（ヘクタール）ほどの小さな畑で年間50品目以上の旬の有機野菜を露地栽培し、飲食店や全国の契約消費者に直接販売する、というちよつと変わった経営スタイルを取っています。

15年前に農園を立ち上げる前は、僕は大学を出て会社に就職した普通のサラリーマン。僕も含めて7人のスタッフ全員が、この農園に入社するまでは農業の経験がない者ばかりです。そんな素人集団が、都内の一流レストランのシェフをはじめ、舌の肥えたお客さんに喜んでもらえる美味しい野菜を作り、経営的にも何とか成り立っています。

カネも技術もない僕たちの強みは、高いモチベーションと徹底した業務の効率化。農園をコンパクトなサイズに保ち、生産から販売までを一貫して手がけることが、環境の厳しい農業界での僕たちなりの生き残り策です。お客さんには深い喜びを味わっ

てもらい、僕たちは好きな仕事でメシが食える。これが、僕たちの目指す「小さくて強い農業」です。

と、いうと、聞こえはいいですが、見通しがあつてここに向かつてきた訳では全くありません。ここまでの自己紹介は全くの結果論。問題にぶつかっては、場当たりにバタバタあがき、何とか生き延びた結果が今の形です。いつのまにか「起業した人」ということになっていますが、自らの強い意思で新たな道を歩んだというよりは、事故で脱線してしまっただけ。戦略や先見とはほど遠い人生を歩んできました。本編にも登場する長野で農業を営む友人、萩原紀行氏は、拙著『キレイゴトぬきの農業論』（新潮新書）を読んだ後輩から、

「萩原さん、久松さんをご存じなんですか？ あの人、すごい戦略家ですよね！」
と言われて思わず、

「違うと思うよ。あの人はもっとバカな人だから……」
と答えてしまったそうです。

農業のセンスもガッツもない僕は、自分を栽培者としては二流、経営者としては三流だと思っています。振り返ると、失敗の山また山。始めた頃はもちろん、昨年この

とですら思い出さなくない恥ずかしいことばかりです。これからも壁に当たり、そのたびにあがいて、情けない失敗を繰り返しながら生きていくのだと思います。

確かに、農家出身ではない人間が農業を始めるのは、楽なことではありません。政府の調査では、就農10年以内の農業者の7割以上が、生計が成り立っていないと答えています。周りを見ても、同じ頃に就農した仲間たちが、一人また一人と辞めていています。

国や自治体は、農業に取り組む人を増やそうと、さまざまな就農支援制度を設けています。準備金の給付、有給の研修プログラムの提供など、僕たちの時代には考えられない充実したもののばかり。いい時代になったなあ、と思う一方で、そうした制度で本当に強い農業者が育つのかと、疑問も感じています。制度が「充実」していけばいくほど、15年前の僕が、その制度には魅力を感じなかったらと思うからです。

「栽培技術や経営管理を身につけ、しっかりした資金計画を立てましょう。家族の協力を取り付け、地域とのコミュニケーションが取れる人間になりましょう」

就農時に、さまざまな受け入れ自治体でそう言われました。今聞くと、その通りです。一つも間違っていないです。けれど、就農したときの僕は、そんなことに全く聞く

耳を持ちませんでした。

事業計画とかじゃないんだよ。

地域に溶け込むとかじゃないんだよ。

俺はただやりたいんだよ。

結局何も分からないまま、手続きを全部すっ飛ばして農業の世界にもぐり込んだので、始めてからずいぶん遠回りをしました。それでも、無駄な経験は何一つありません。この仕事が本当に好きで、体の中で燃えている火が強かったので、失敗から多くの事を学び、たいいていのことは乗り越えられました。

「農業は体で覚える昔ながらの仕事」という時代は終わりつつあります。有機農業のようなローテクな世界ですら、経営と科学の考え方が必要になりました。しかし、巷にあふれるノウハウ本に書いてあるような、ビジネスの手管だけで生き残れるほど、農業は甘くありません。「やりたいんだよ！」という消えることのない種火が腹の底になれば、どんなに風を送っても強い炎を燃やし続けることはできないのです。情念という種火に、経営と科学という薪をくべ続けることが必要です。

たとえたとすれば僕は、入試に落ちて、塀を乗り越えて学校の敷地に潜り込んだ受験生のような農家です。今後も僕と同じような人は、「入試」には受からないか、ハナから受けようとしなくていいでしょう。それでも、結果的には僕は今も生き残り、生計が成り立つ3割の方に入っています。もしかしたら、合格発表から漏れた番号の側に、何かのヒントが隠されているのかもしれない。それなら、たとえ未熟で恥ずかしい過去でも書き記すことに意味があるだろう、というのが、今回筆を執った理由です。

はじめに断っておきますが、この本には、「農業経営のコツ」や「有機栽培のポイント」のような正解は何一つ書いてありません。成功する人もしない人がいる以上、正解はどこかにはあるはずですが、でも残念ながら、答えがどこにあるのかは今の僕には分かりません。僕にできるのは、現実に農業の現場で起きていることや、そこで考えたことを伝えることだけ。成功のコツを直接語ることはできないが、小さな具体例を積み重ねることで、「正解」の輪郭を浮かび上がらせることはできるかもしれない。そんな風に考えました。

この本は、

・王道を歩む農業の精鋭には、こんなのもいるんだからもっと先へ行けるぞという自信を

・自分には向いていないと思う人には、それが挑戦を諦める理由にはならない根拠を

・その他多くの就農希望者には、馬鹿馬鹿しくなって夢から覚めるきっかけを

それぞれ与えられることを願って書かれたものです。

よほどの幸せ者でない限り、今の日本がこのままでいいと思っている人はいないはずです。一方で、これから何をどうしたらいいかは、誰にも分かりません。それでも私たちは、力を尽くして生きていかなければなりません。

みんながうらやむ正しい進路などないことがはつきりした今、若者は好きなことをつらぬき、自分の頭と手で考え、時代を切り開かねばなりません。農業は、それを小規模でも実現できる、数少ない仕事の一つです。人間の思い通りにならない条件の中で勝機を見つける、知的でクリエイティブな農業の魅力が伝わることを願っています。
